生徒の自己肯定感を高め，互いに認め合い高め合う学級経営の在り方について
～個を生かす指導と，活躍を認め合う場面設定を通して～

利根町立利根中学校　教諭　髙橋　瑞樹

1　主題設定の理由

教員そして担任なり，今年で７年目となる。これまでの学級経営を通して，指示をしないと動けない生徒や，学級集団の一員としての自覚・感覚をもてずに生活をする生徒が多いと感じていた。自分の目指す学級像は「生徒一人一人が自信をもち，生徒自身で互いに認め合い，支え合うことができる学級」である。そのために大切なことは，学級の一人一人に目を向け，実態を把握し，個を生かす場面を設定する支援を行い，自己肯定感を高めることであると考える。その上で，互いの活躍を認め合う場面を設定することで，学級の一員としての自覚が芽生え，学級集団として成長ができるようにする。また，個に目を向けた上で,互いを認め合う場面設定をすることで個の成長,学級の成長につながると考え，本主題を設定した。

2　主題に迫るために

(1)　基本的な考え方

自己肯定感とは，自分を客観視して他者との違いを理解し,「自分は自分でよい」と自身を認めて受け入れる感覚であると考える。

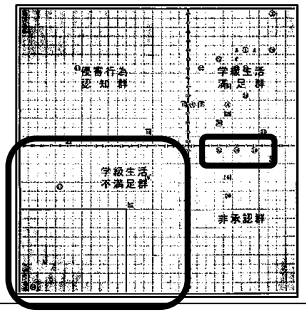
個を生かす指導とは，客観的なデータや日常における様々なかかわりから生徒一人一人を理解し，必要な支援を行うことで，生徒の自己肯定感を高め，主体的に行動できるようになることである。主体的に行動できるようになると，自分の行動が「周囲の役に立っている」と感じ，そして自分の行動が「周囲によい影響を与えている」と感じるようになり，さらに主体的に行動するようになると考える。

活躍を認め合う場面とは,教師から生徒,または生徒同士が友達の活躍を伝え合い,共有する場面である。自分の行動を友達に認められることで，行動の価値付けがされて自己肯定感が高まると考える。

行動の価値付けとは，生徒が行った行動そのものを教師，または生徒同士で肯定的にフィードバックしていくことである。学級において，どの行動にどのような価値があるのかを教師と生徒が共有することで，自分の行動に肯定感を感じることができる。どのような行動に価値があるかを見出すことができる生徒が育成できると考える。

肯定的フィードバックとは，生徒が行った行動に対して，肯定的な感想を伝えることである。自分の行動を客観的な目線で伝えられることと，肯定的な感想を伝えられることで自分の行動に自信をもつことができると考えた。

資料１　Q-U テスト(７月)



(2)　実態調査

資料１は，令和元年度７月の Q-U テストの結果である。左下の学級生活不満足群に属している生徒は，静かで自分の意見をあまり表に出さない傾向であった。家庭環境が複雑，過去に友達関係のトラブルが多い生徒達が属していることを読み取ることができた。また，非承認群で満足群に入りそうな生徒は，いずれも実行委員など経験している生徒である。他のアンケートなどにも肯定的な回答をしていたため,普段の様子から予想できない結果だった。表面上では読み取ることが難しい実態を客観的なデータを分析し，把握することができた。

3　実践内容と結果

(1)　個を生かす指導

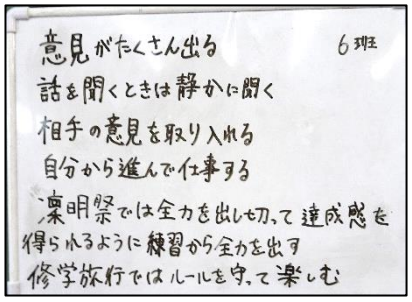
ア　個人面談の重視

日直は最後に戸締りをして，教室を出るという役割だが，その退出時に「お話タイム」という名で個人面談を実施している。学級日誌に面談用の用紙を付けておき，記入させ，それに基づいて行っている。この実践のよさは定期的に全員と面談できることである。内容は，主に普段行っている行動を肯定的フィードバックしている。また，放課後だからこそ「この教科が分からない」,「友達・部活で悩んでいる」,「家でうまくいっていない」など普段言いづらい内容の話をする生徒がいて，生徒理解に役立てた。

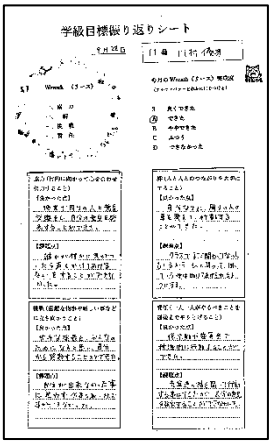
イ　学級目標の活用

学級目標を決める際に，教師が求めている学級像を全体に伝えている。その上で生徒に資料２のように，よい学級になるための行動を考え，行動の価値付けをする。それらを分類して，学級目標の基礎となるキーワードを決める。そのキーワードがすべて含まれるような学級目標を全員で考え，学級目標としている。今年度の学級では，キーワードが「絆」「成長」「挑戦」「協力」となり，学級が完成していく様子を花飾りの「リース」に例え，目標とした。定期的な行事のたびに学級目標を掲げ，一人一人にできる行動を考えさせ，生徒がそれぞれに実行していけるようになった。

資料２　学級のための行動



資料３　振り返りシート



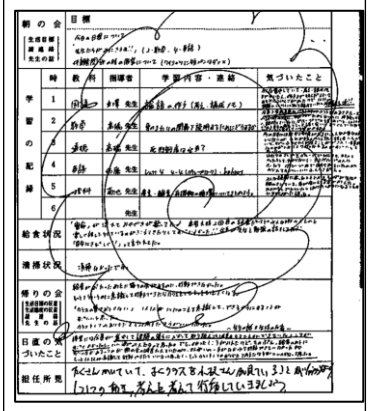
ウ　リーダーシップの育成

生徒と共に学級を運営し，学級への関わりを通して自己肯定感を育成する。その中心となる学級委員のリーダーシップ育成は大切である。そこで，リーダーシップとして，気付きを起こすため学級委員と週１回面談を行い，学級の現状を聞いたり，学級委員へ肯定的なフィードバックをしたりした。その結果，今年度の学級委員は，資料３のような学級目標振り返りシートや，学級アンケート集計した掲示物を自宅で作成し，学級において活用した。また，学級委員だけではなく係・班活動，学級会，行事で一人一人に役割を与えて，それぞれの持ち場で責任をもつことでリーダーシップの育成を図っている。

エ　学級日誌の指導

学級日誌は資料４のように，読み返した時にその日のことが分かるよう具体的に書くように指導している。日直として責任を果たすためと，学級の様子を客観的にフィードバックして，自身の次の行動の動機付けにするためである。指導を続けたことで，生徒から「周囲を今まで以上に見るようになった」,「友達のやっていることを見ることができた」という声が上がった。書くたびに具体的になり，友達や学級のためにやっている行いを書く生徒が増えている。また，日直のたびに生徒が学級日誌を読み返すことが肯定的フィードバックになったと考える。

資料４　学級日誌



オ　席替えアンケートの工夫

席替えは教師が友人関係など生徒の実態に基づいて，意図的に行っている。そのためにアンケートを行って交友関係や，学級の状態を把握している。アンケートには，班長をやってみたいか，これからかかわってみたい人，学級で活躍した人などを書かせている。アンケートに名前が上がらなかった生徒にも目を向けるため，相談したいことや最近の学級の様子も書かせている。班長をやってみたい人や，リーダーシップが育ってきた人を分けて配置することで，個を生かせるようにした。席替えを意図的に行うことで，班長を担う生徒が増えたり，立候補する生徒が増えたりしている。

カ　話合い活動の充実

話合い活動は，自分の意見を他者に伝える力や，人の話を聴く力を身に付けるために大切である。自分の意見を他者に受け入れてもらうことで，自分の考えに自信が付いて，自分を表現できるようになる。年度初めになぜ話合いが大切で，なぜ意見を言う，聴くことが大切かという行動の価値付けを行う。その後，話合いマニュアルを学級で作成して，全体で共有する。そのマニュアルを基に，毎回学活の開始５分は話合い活動の時間を設けている。始めは,「もし無人島にいったら何を持っていくか？」のような誰でも参加できるような題材にした。話合いを重ねるにつれて，自分の考えをもって他者に伝えることができるようになってきた。学級会では１時間で，全員の生徒が発表をすることができるようになった。

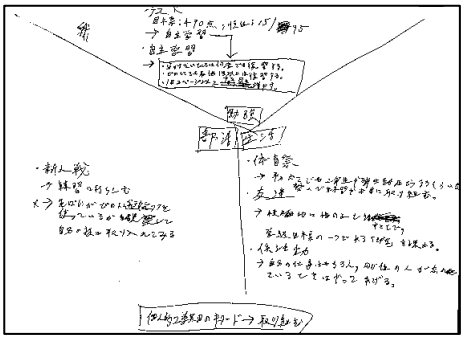
キ　考え，議論する道徳の実践

道徳では，正しい解答を探すことより，自分事として考え，考えを周囲に伝えるように年度初めに価値付けを行った。そして，道徳では学活の時間以上に他者の話を聴くこと，自己と他者の違いを理解して，他者の考えを認めることを重視した。発表時間を確保するため，発表方法は発表をする生徒が指名されず自身で起立して，自分の考えを表現している。その結果，一人一人が自分の意見をもって，他者と話し合うようになった。また，発表では次々に自ら起立して自分の意見を周囲に伝えている。同時に立った際には，譲り合って途切れさせることなく発表が続いた。道徳の時間が楽しい，１番大事な教科ではないかという生徒が増えている。

ク　思考ツールの活用

学活や道徳において，自分の考えを整理するために思考ツールを活用している。自分の考えをもっていても考えを整理することが苦手だったり，書くことが苦手だったりする生徒がいる。その生徒に応じて必要な思考ツールを提示して活用させることで，一人一人がもつ自分の考えを表現することができている。４月の学期の目標を１時間かけても１文字も書くことができなかった生徒がいた。２学期の目標には，資料５のように思考ツールを用いて，自分の力のみで作文を完成させることができるようになった。苦手な生徒だけではなく，全生徒に思考ツールを紹介して使用することで，自分の考えを整理したり，表現したりすることができるようになった。慣れてくると生徒自身で思考ツールを選択して，使うことができるようになった。

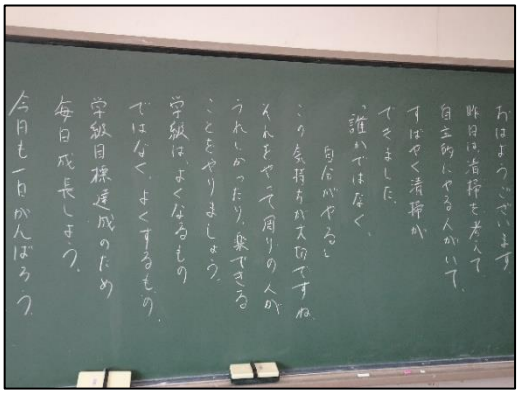
資料５　思考ツール



(2)　活躍を認め合う場面設定

ア　朝の黒板メッセージ

資料６　黒板メッセージ



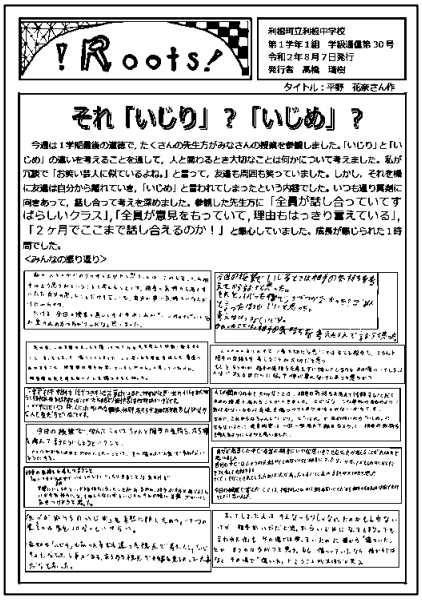
毎朝，黒板に生徒へのメッセージを書いている内容は生徒の良い行動や，生徒に考えさせたいことやこうしてほしいことなどを書いている。良い行動を行ったことへの肯定的フィードバックをして，何がどのように良かったのか理解し，活躍を全員で共有できるようにしている。学級目標で決めた際に価値付けした行動と照らし合わせて書くことで，生徒自身もなぜ良かったのか理解することができていた。これによって，学級目標を意識し，主体的に考え，よい学級にするための行動をとることができるようになった。

イ　帰りの会の有効的な活用

帰りの会で生活班の班長が，活躍した班のメンバーを一人紹介する「今日のヒーロー」をいう取組を続けている。年度初めは抽象的なものが多かったが，教師が日直を取り上げてグッドモデルを提示するなど指導を続けた。３週間目には具体的になり，生徒同士の肯定的フィードバックをする場面になっていった。慣れてくると，「複数名活躍した人を発表してもいいですか」と尋ねる生徒や，休み時間のたびに活躍をメモする生徒が出てきた。結果的に昨年度の学級では，９月には班長が全員の活躍を紹介する学級となった。言われた生徒は照れくさそうに笑っていたり，周囲から「おー，すごい」，「ありがとう」などの声が聞こえたりと温かい雰囲気になった。

ウ　学級通信の発行

資料７　学級通信



学級通信は，週２・３回のペースで出している。タイトルは全員の名前を定期的に出すため，生徒が書いたものを使用している。内容は学活，道徳の時間に書いた生徒の考えや振り返りを取り上げて紹介したり，生徒が学級や友達のために行った場面の写真を取り上げたりしている。生徒自身の活躍を友達や保護者に伝えて共有するツールとして使っている。できる限り生徒の氏名，発言，記述を書いて肯定的なフィードバックも行っている。配付するタイミングは，生徒が読むことができる時間を確保できるように配付している。それにより，ほとんどの生徒が配付されるとすぐに読んでいる。学級通信に取り上げられた生徒は，さらに自分の仕事に責任をもったり，取り上げられた以上の工夫をしようとしたりしていた

エ　席替え前の手紙

席替えする前に同じ班のメンバーに手紙を書いている。内容は生徒に任せているが，助かったこと，活躍したことなど一緒の班で感謝している内容を書くように指導している。手紙を交換した後に，真剣に読んでいたり，お礼を言い合っていたりする姿が見られた。実践を繰り返すことで，班長の今日のヒーローを真剣に聞くようになった。また，班長だけでなく全員が活躍を見付けて認め合い，手紙に記述するようになった。

4　実践の成果と今後の課題

(1)　成果

個を生かす指導をするため，一人一人の自己肯定感を高めることは有効であった。普段見ることができない生徒の内面的な部分を Q-U テストや個人面談を通して，理解することができた。多面的に生徒理解をしたことで，一人一人に必要な役割や支援を考えて実行できた。自己肯定感が高まり，周囲へ貢献をしようという気持ちになり，生徒自身で「自分には何ができるか」を考えることができるようになった。学級での話合いや，生活でも学級委員だけでなくお互いに呼び掛け，係以外の仕事を見付けて行うなど自分の力を発揮しようとする生徒が増えた。各教科での話合い活動では，全員が参加するだけではなく，自分の考えを発表しようとする生徒が増えていった。

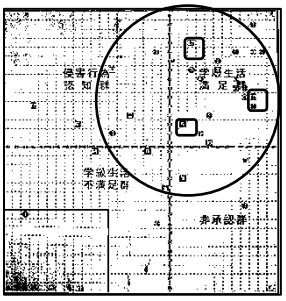
活躍を認め合う場面設定は，自己肯定感を高め，互い認め合い支え合う学級になるため有効であった。行動の価値付けをした上で，活躍を肯定的にフィードバックすることで，自分の行動が他者にどのような影響を与えているか理解することができていた。朝の黒板や今日のヒーローなどを毎日行うことで，学級全体で認め合うことが日常の中に定着していった。9・10 月になると「ありがとう」,「やっておくよ」など声を掛け合う場面が増えて，それが学級の当たり前のことになっていった。そのことを教師が取り上げることで，さらに認め合う場面や支え合う場面が増えていった。

行動の価値付けは，自己肯定感を高めて，互いに認め合うことに有効であった。学級の中で何を大切にするか教師と生徒が共有することで，肯定的フィードバックをした際に自己肯定感を高め，相手の活躍を認め合う際の指標となった。また，生徒自身で行動の価値付けを初めにしたことで，目指す目標を意識して行動することができた。

肯定的フィードバックは，自己肯定感を高めるために有効であった。自分の行動に目を向けることができない生徒が多かった。肯定的フィードバックをすることで自分の行った行動を客観的に見ることができた。さらに，どのような影響を与えたのかを考える機会を作り，自分の行動が周囲に与える影響を認識させることができた。自分の行動に自信をもつことができる生徒が増え，主体的に動ける生徒が増えた。1 年生の時に「前に出ている人は，すごい」と言っていた生徒に「すごいと言えるあなたもすごい」と伝えた生徒は，3 年生では，全体の前に立つようになっていた。肯定的フィードバックを繰り返したことで，自己肯定感が高まったと考えられる。

様々な手立てを講じ，昨年度 12 月は資料 8 のような結果になった。7 月で非承認群にいた 3 人の生徒は，満足群に属することができた。不満足群にいた生徒は，右上に近付いた。全体としても右上に分布することができた。

資料 8
Q－U テスト(12 月)



(2)　課題

課題は，生徒理解の際に自分の認識だけで支援を立てると，その生徒に対しての支援が正しいかどうか判断することが難しいことである。他の先生方と共通理解を図り，さらに多面的な見方をすることでよりより手立てを見付けることができると考える。また，行動の価値付けが教師の押し付けになっていないかということである。普段からこうなってほしいという期待から押し付けになっていないか自問自答している。生徒と対話をしながら，共に学級を運営するという視点を忘れてはいけないと感じた。